第３４話　平安時代の学芸美術

菅原道真の意見によって遣唐使が停められると、漢文学は漸く勢いを失い、国文学がこれに代わった。　平安時代は所謂 和魂漢才から更に一歩を進めて、日本固有の優美な特色を発揮した時代です。
殊に優れた女性の文学者の多く出たことでは、前にも後にも例がない。

漢文学の衰退

平安時代の初めの頃の約百年間は、大いに漢文学が行われました。　勅撰の歴史書を始め多くの書物は大抵漢文を用いて、大宝令の定めた大学及び国学はいうまでもなくその他の諸氏の私学校でも、主として漢文学を教えたものでした。　しかし、宇多天皇の御代に、菅原道真の意見によって遣唐使が停められ、中国との交通が絶えると共に、漢文学は漸く衰えだして国文学が大いに興って来ました。

和魂漢才

一にも二にも漢文学が重んぜられた時には、物の見方や考え方なども自然と中国風になりがちでしたが、わが国と中国とでは、国の成り立ちから国体は勿論、いろいろの事情がちがっていますから、何もかも中国風にするという訳にはいきません。

そこで、和魂漢才といって、精神はどこまでも日本固有のものを失わずに、中国から伝えて来た学問を活かして用いるようにしなければいけないという事が唱えられたのです。　遣唐使が停められて、長いあいだ受けていた中国の影響から全く脱するようになると、それが更に一歩を進めて、日本には日本の風があるという事をはっきりと知るようになって、ついに文学にも純粋の国文学が大いに興って来たのです。　それにはまた、平仮名や片仮名が考え出されて、国語を記すのに頗る便利となったということもありました。

平仮名と片仮名

一体、わが国には、もとは文字がなかったので、奈良時代に文学が大いに発達したときでも、これを記すのに漢字の音を仮りたことは、前に奈良時代の文化を述べた時に、『古事記』や『万葉集』の例を挙げて示した通りですが、漢字は字画が多くて、ただ一音の代わりとして書くのには、手がかかりすぎて不便な為に、いつからともなく片仮名や平仮名が考え出されたのです。

片仮名は漢字の偏や旁や画などを取って簡単にしたもので、初めは漢字の代わりに符号として用いたのでありましたが、後にはそれが独立して一字となったのであります。　今、以下に片仮名と其の基になった漢字を並べて挙げて見ますと、

阿　伊　宇　江　於　　ア　イ　ウ　エ　オ

加　幾　久　気　己　　カ　キ　ク　ケ　コ

散　之　須　世　曾　　サ　シ　ス　セ　ソ

多　千　門　天　止　　タ　チ　ツ　テ　ト

奈　二　奴　禰　乃　　ナ　ニ　ヌ　ネ　ノ

八　比　不　辺　保　　ハ　ヒ　フ　ヘ　ホ

末　三　牟　妙　毛　　マ　ミ　ム　メ　モ

也　伊　遊　江　與　　ヤ　イ　ユ　エ　ヨ

良　利　流　礼　呂　　ラ　リ　ル　レ　ロ

和　井　宇　回　乎　　ワ　ヰ　ウ　エ　ヲ

となります。　世にこれを**吉備真備**（きびのまきび）の作であると伝えていますが、其の点はまだはっきりと分かっていません。　けれども、これを五十音図に並（なら）べたのは**真備**（まきび）であるかも知れません。　彼は唐に留学（りゅうがく）した時に、音韻（おんいん）の学を研究（けんきゅう）して来た人だからです。

又、平仮名（ひらがな）は漢字（かんじ）を早（はや）く書くためにくづして（即（すなわ）ち草体（そうたい）にして）いるうちに、だんだんと変化（へんか）して簡単（かんたん）になったもので、これを漢字と並（なら）べて記（しる）して見ますと、

以　呂　波　仁　保　辺　止　　い　ろ　は　に　ほ　へ　と

知　利　奴　留　遠　　ち　り　ぬ　る　を

和　加　與　太　礼　曾　　わ　か　よ　た　れ　そ

門　禰　奈　良　武　　つ　ね　な　ら　む

宇　為　乃　於　久　也　末　　う　ゐ　の　お　く　や　ま

計　不　己　江　天　　け　ふ　こ　え　て

安　左　幾　由　女　美　之　　あ　さ　き　ゆ　め　み　し

恵　比　毛　世　寸　　ゑ　ひ　も　せ　す

となります。　此の平仮名（ひらがな）は**弘法大師**（こうぼうだいし）の作であるといわれていますが、これも明らかではありません。　ただ、いろは歌にしたのは**大師**であったでしょう。　この事は既（すで）に前に述べました。

国（こく）文学の発達

これらの仮名（かな）が発明されると、国語（こくご）を書くのに非常に楽（らく）で都合（つごう）がよかったので、従（したが）って国文学（こくぶんがく）の進歩（しんぽ）をも大（おお）いに促（うなが）すことになりました。　しかし、なお初（はじ）めの間（あいだ）は、男子（だんし）は漢文（かん）を書くのが普通（ふつう）で、仮名を用いる国文（こく）は主として女子（じょし）の書くものとされていたようです。

朱雀天皇（すざく）の御代に、**紀貫之**（きのつらゆき）が土佐守（とさのかみ）の任（にん）が果（は）てて京都に帰（かえ）る途中（とちゅう）の事を書いた『土佐（とさ）日記』を国文で書くのに、わざわざ巻頭（かんとう）に「男（おとこ）もすなる日記というものを女（おんな）もして見んとてするなり」と断って、女子が書いたような形（かたち）にしたなども、一つはそれがためであったろうと思われます。　ここに「男もすなる日

記」とあるのは、「男も漢文で書く日記」という意味なのであります。

六歌仙

さて、和歌は奈良時代の末に一旦衰えかけましたが、平安時代になってから次第にまた盛んとなり、清和天皇の御代の頃には、世に六歌仙と称せられる**在原業平**、**小野小町**、**僧正遍昭**、**文屋康秀**、**喜撰法師**、**大友黒主**などが出ました。　中でも**業平**と**小町**は最も優れていました。

業平に就いては前に**惟喬親王**の事を述べた時にもちょっと書いておきましたが、其の文が簡素で有名な『伊勢物語』は彼の著でもあるといわれているほどで、文も歌も非常にすぐれています。

或る年、彼は二三人の友と共に東国の方へ下った時に、三河の八橋（愛知県）という処に着きました。水がいくつにも流れ別れて、木の橋を八つ渡してある処なのですが、其の沢のほとりの木陰で馬から下りて、弁当に持って来た糒を食べながら、見ると、其の沢に燕子花が美しく咲いています。　友の一人に、かきつばた という五文字を句の上に据えて、旅の心を詠んで御覧なさいといわれて、**業平**は、

唐衣　きつつ馴れにし　つまあれば　　はるばるきぬる　旅をしぞ思う

という歌を詠みました。　共に住み馴れた妻が都にいるものだから、はるばると遠く来た旅は実に物憂く悲しいという意味で、皆身につまされて涙を落としたということですが、即座に五文字をわけて、句の上に据えて、立派な歌を詠んだところが彼の才のすぐれたところであります。

なお旅をつづけて行って、武蔵（東京都）の隅田川のほとりに着きました。　悠々と水の流れている姿を見るにつけても、はるばると遠く来たものだという気がして、誰も彼も都の事や道中の悲しく淋しかった事などを話し合っていますと、渡守が、「早く船に乗って下さい。日が暮れますから」というので、乗って渡ろうとする折しも、白い鳥の嘴と足とが赤く、鴫くらいの大きさなのが水の上に遊びながら魚を捕って食べています。　都でも見たこともない鳥なので、何という鳥かと渡守に尋ねると、「都鳥です」と答えたのを聞いて、**業平**は、

名にしおわば　いざこと問わん　都鳥　　わが思う人は　ありやなしや

と詠みました。　都という名にしている鳥ならば、定めて都の事を知っていようから聞いて見るぞ、私が懐かしく思う人は無事でいるかどうかと、という意味です。　これを聞くと、船の中の者は皆泣いたという事です。

百人一首の中には平安時代の歌が殊に多く入っていますが、**業平**の歌は、

千早振る　神代もきかず　龍田川　　からくれないに　水くくるとは

というのがあります。

業平が容貌の立派な美男子であったのに対して、**小町**は美婦人として殊に聞こえています。　百人一首の中には、

花の色は　うつりにけりな　いたづらに　　わが身世にふる　ながめせしまに

というのが入っています。

勅撰和歌集の始

ついで**醍醐天皇**の御代になりますと、所謂延喜の聖代で、都は泰平に治まっていましたから、文化も大いに開けたが、この御代に、**紀貫之**、**紀友則**、**凡河内躬恒**、**壬生忠岑**らに仰せられて、『万葉集』に漏れた古歌を始め、其の御代までの和歌の中からすぐれたものを選んで集めさせられた。

貫之らは延喜五年四月にそれを奉りました。　『古今和歌集』がそれで、実に勅撰和歌集の始めであります。　これを見ても、其のころ、いかに和歌が盛んであったかが分かります。　勅撰集は、其の後、室町時代の頃まですべて二十一回ほどありましたから、総称して二十一代集と呼んでいますが、『古今和歌集』は其の最初の勅撰集として、其の体裁や何かが後の世の模範となりました。

また、この集に添えた**貫之**の序は、和歌の成り立ちから、其の種類や作者の事や何かを書きつらねたものですが、これも国文の模範として大いに世に聞こえています。　彼の歌はこの集の中にも百首近くも入っていますが、百人一首には、

人はいさ　心も知らず ふるさとは　　花ぞむかしの 香ににほひける

というのが入っている。

なお序でに、先に挙げた**業平**と**小町**との外の六歌仙の人々や、**貫之**の外の撰者の人々の歌を一首づつ次に挙げておきましょう。

はちす葉の 濁りに染まぬ 心もて	なにかはつゆを 玉とあざむく	僧正遍昭
吹くからに 秋の草木の しほるれば	うべ山風を あらしといふらん （一書には　むべ）	文屋康秀
わが庵は 都のたつみ しかぞすむ	世をうぢ山と 人はいふなり	喜撰法師
かゞみ山 いざ立ち寄りて 見て行かん	年経ぬる身は 老いやしぬると	大友黒主
久方の ひかりのどけき 春の日に	しづごころなく 花の散るらん	紀友則
春の夜の やみはあやなし 梅のはな	いろこそ見えね 香やはかくるゝ	凡河内躬恒
有明の つれなく見えし 別れより	あかつきばかり うきものはなし	壬生忠岑

散文の発達

こうして和歌が盛んになると共に、国文学は散文の方面にも発達して、『竹取物語』や『伊勢物語』は早く既に延喜の頃より以前にできていましたが、**朱雀天皇**の御代に、貫之の『土佐日記』が最初の紀行文として現われてからは、いよいよ盛んに仮名文が行われた。

殊に**一條天皇**の御代には、すぐれた女の文学者が一時に輩出して、物語とか、随筆とか日記だの

に立派な多くの作品を遺しました。　これは藤原氏の人々が争って自分の娘を宮中に入れて、その侍女に文学にすぐれた女子を撰ぶことを競ったからで、たしかにこの時代の一つの特徴です。　中でも最もすぐれて名高いのは**紫式部**と**清少納言**であります。

紫式部

紫式部は式部丞**藤原為時**の娘です。　幼い時から学問が好きで、物おぼえがよく、人が本を読むのを聞いて皆諳んじたといわれています。　嘗て兄が『史記』を読んで、時々忘れたところがあると、そばから教えたほどであったといいます。　それで、父の**為時**はよく頭を撫でて、「お前が男に生まれたらよかったのに」と言い言いしたということです。

後、右衛門佐**藤原宣孝**に嫁しましたが、不幸にして早く夫に死に別れたので、其の後は、子らの成長を楽しみにしながら、つつましい生活を送っていましたが、その才学の聞こえが高く、ついに**一條天皇**の中宮**上東門院**に召されてその侍女となりました。

源氏物語

その著『源氏物語』は五十四帖からなる大部の物で、学問も深く、諸芸にも通じ、容貌も姿も美しく立派な源氏の君という皇子を中心として、其の頃の宮廷の生活を描いた小説ですが、文章もうるわしく、構想も巧なので、古来、不朽の傑作といわれています。

紫式部という名は、父の官名を姓にかけて藤式部といっていたのを、その花の色に因んだ紫式部と改めたともいい、また、『源氏物語』の中の紫の上という女の人の事を最もよく描いたので、人がそう呼んだのを其のまま自分でも名告るようになったともいわれています。　実名はわかっていません。

紫式部にはまた日常の生活を書いた『紫式部日記』というのもあります。　また、和歌の道にも通じていました。　百人一首には、

めぐりあひて見しやそれとも わかぬまに　　雲がくれにし 夜半の月かな

というのが入っています。

清少納言

紫式部と共にその才学の世に聞こえているのは**清少納言**です。　肥後守**清原元輔**の娘でありますが、やはり実名はわかっていません。　**一條天皇**の皇后に仕えて少納言と称したので、それに清原の清を冠して**清少納言**といったのです。　祖父の**深養父**は、『古今和歌集』の中の作者であり、父は『後撰和歌集』の撰者であったのですから、その血統は文学の才に富んでいたのでしょう。

ある雪の日に、皇后は御前にまいっていた女房たちに向かわせて、「香炉峰の雪はいかに」と仰せられると、**清少納言**は直ぐに起って御前の御簾を捲き上げました。　それがいかにもすばやく、響きの声に応ずるが如くでありましたから、皇后は殊の外にご感心なされて、ご機嫌がうるわしかったということであります。

これは、中国の有名な詩人の**白楽天**の詩の中に、「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き、香炉峰の雪は簾

を撥げて看る」という句があるので、皇后はそれを仰せられたのでした。　そのころは**白楽天**の詩なら誰も彼も殆ど知らぬ者などないくらいに愛誦されていたのですが、不意の事でありましたから、他の者は咄嗟に思いつかなかった中で、独り**清少納言**が機転を利かせたのであります。

清少納言は才学に秀でた上に、男まさりの性質でしたから、よく男子などとも議論をして相手をへこましたということです。

枕草紙

その著した『枕草紙』は、そのころの貴族の生活や、人情、風俗などに就いて、見たり聞いたり感じたり考えたりしたことをそのままに書きつけた随筆集ですが、その鋭い観察ときびきびした文章とが、いかにも男まさりの作者の人柄を見るようだと聞こえています。　**清少納言**もまた和歌の道に長じていました。　百人一首には、

夜をこめて 鳥のそらねは はかるとも　　世にあふさかの 関はゆるさじ

というのが入っています。

その他の女流文学者

此の二人の外に、右大将**道綱**の母は『蜻蛉日記』を著わし、**平兼盛**の娘で**大江匡衡**の妻となった**赤染衛門**は『栄華物語』の著者といわれ、**紫式部**の娘の**大弐三位**は『狭衣物語』を作ったと伝えられています。　越前守**大江雅致**の娘の**和泉式部**は最も和歌に秀でていましたが、『和泉式部日記』という小説風な物をも作っています。

この他、祭主**大中臣輔親**の娘の**伊勢大輔**を始め、**和泉式部**の娘の**小式部内侍**、**赤染衛門**の娘の**江侍従**、**大弐三位**の妹の**弁の局**、中務卿**敦慶親王**の娘の**中務**、**源　頼光**の娘の**相模**、参議**藤原広業**の娘の**新宰相**、左京大夫**藤原道雅**の娘の**中　将**という風に、女子で文や歌に巧みな者は実に数え切れないほどいました。

やすらはで ねなましものを 小夜ふけて　　かたぶくまでの 月を見しかな　　赤染衛門

暗きより 暗きみちにぞ 入りぬべき　　はるかに照らせ 山のはの月　　和泉式部

いにしへの 奈良のみやこの 八重桜　　けふ九重に にほひぬるかな　　伊勢大輔

大江山 いく野のみちの 遠ければ　　まだふみも見ず天の橋立　　小式部内侍

女子すら既に上の如くでありますので、男子の文学に秀でた者は更に一層多かったことでしょうが、中でも**藤原行成**、**藤原公任**、**藤原齋信**、　**源　俊賢**、の四人が最も著名で、四納言と言われました。

三船の才

或る年の秋、**道長**が大堰川に船を浮かべて、大勢の公卿らと共に嵐山の紅葉を賞した時に、船を

詩の船、歌の船、管弦の船と三つに分けて、漢詩を作る人は詩の船に、和歌を詠む人は歌の船に、音楽の上手な人は管弦の船にと、それぞれ其の道の達人を乗せた事がありました。

その時、**公任**はおくれて来たので、道長が、「あなたは何でも出来る人だが、どの船に乗る？」と尋ねると、「どれでもよろしい」と答えたのです。　世人は三船の才であるといって賞賛したということです。

公任は歌の船に乗って、

朝まだき　嵐の山の　さむければ　　もみぢのにしき　着ぬ人ぞなき

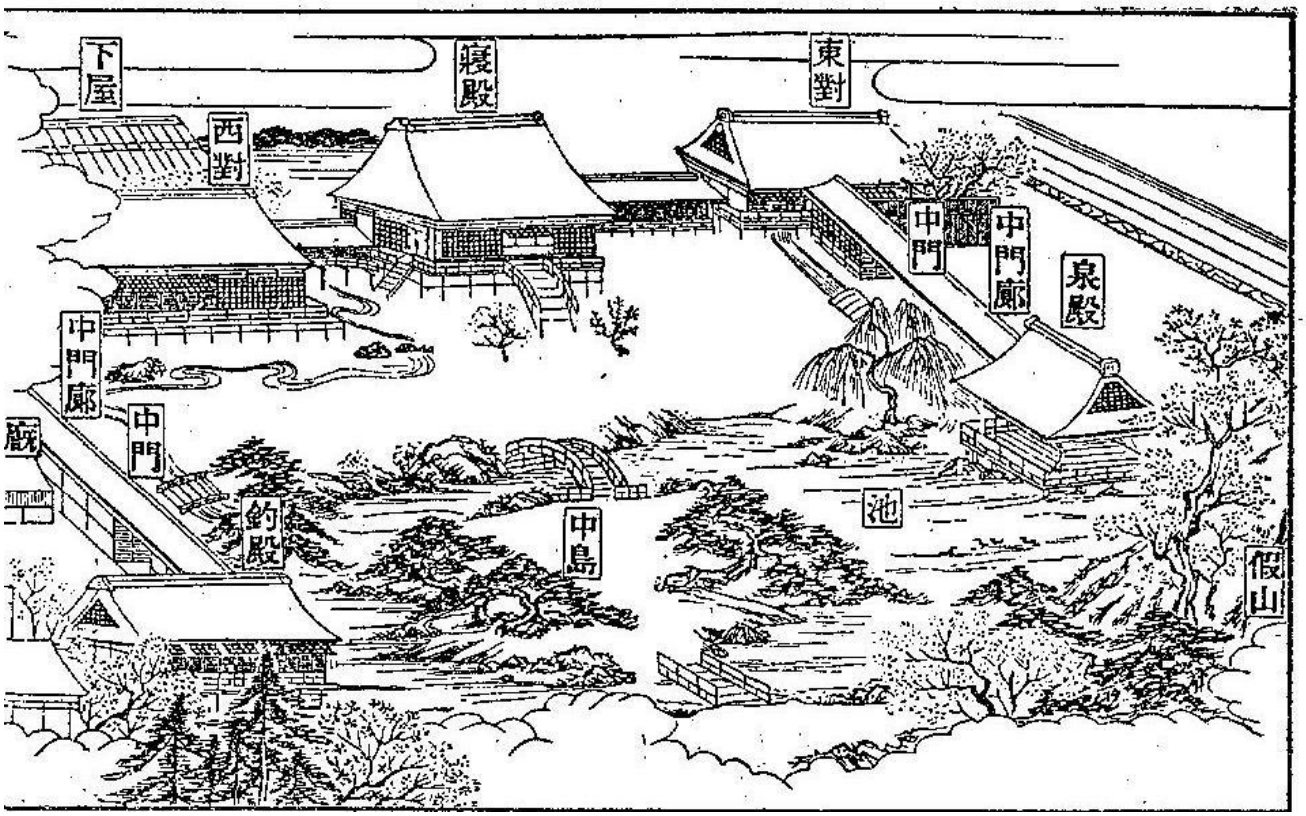
と詠んだので、皆感心したといいます。

美術や工芸もまた漸く中国の文化の模倣から離れて、わが国の固有の特色を出しはじめました。

三蹟

書は**小野道風、藤原行成、藤原佐理**を三蹟と称して、その頃の書道の名人と誉め称えましたが、これを**嵯峨天皇**の御代の三筆と比べると、書体が全く日本化して優美になっています。　絵画も次第に純日本式となって、後には優麗な倭絵となりました。

また、寺院や大きな邸宅なども、藤原氏の栄華につれて頻りに建築されましたが、それらの上にも、これまでとは違った趣味が取り入れられて、大いに日本的特徴が現われました。



貴族の邸宅

貴族の邸宅

其のころの貴族の邸宅は寝殿造りといいまして、北方に南面して正殿があり、これを寝殿といいました。　主人の起臥するところです。　その北と東と西とに対屋があります。　家族の住むところです。

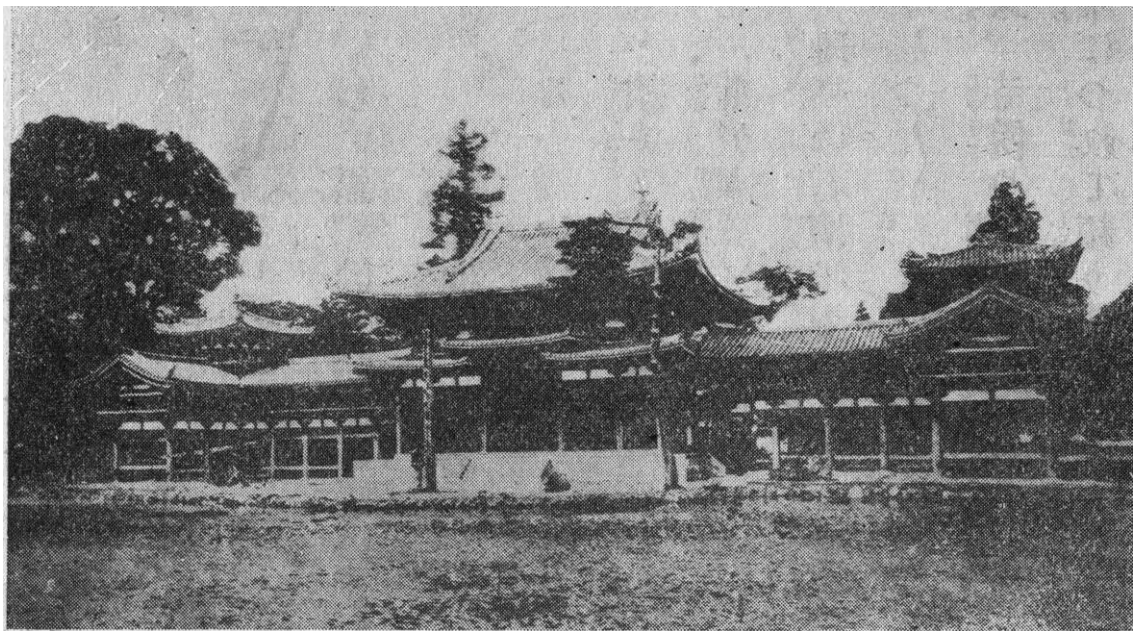
東西の対屋より南方に廊を出だし、その盡きるところに東には泉殿、西には釣殿の設けがあります。釣殿と泉殿とは池に臨んでいます。　池には島、泉殿の先には築山があります。　泉殿から東の対、寝殿、西の対、釣殿と、ぐるっと包んだところを中庭といい、そこから池、築山のあたりにかけて松や柳や桜を植えて風情を添えています。　全体に殿舎の構えの美しく、庭園の造りの麗しかったことはいうまでもありません。

寺院の建築

寺院の建築では、道長の法成寺が群を抜いてその結構に善美をつくしたのですが、建てた後僅かに三十八年で火災に罹って、今は跡方もなくなっています。　そのころの言い伝えに依ると、殿堂の内部の組物や梁などには紫檀などの名木を用い、蒔絵や螺鈿の装飾を施したり、宝玉を鏤めたりして、中央の仏壇には一代の名工といわれた**定朝**の手に成った仏像を安置したということです。

後に**道長**の子の**頼道**が宇治に建てた平等院は、その一部の鳳凰堂が今も残っていまして、恐らく美術的な木造建築では世界一であろうとまでいわれていますが、その当時の人々は、法成寺の立派なのは口を極めて讃めたたえましたが、平等院に就いては殆ど一語もいっていないところを見ますと、いかに法成寺が華麗で壮大で人の目を驚かしたかが分かります。

平等院はもと**頼道**の別荘でしたのを寺としたので、鳳凰堂はその仏殿です。　全体の形は、ちょうど鳥が両翼を張って尾を引いたように、本堂と翼廊と尾廊とから出来ています。　本堂は一段高い石段の上にたち、屋根は二重で、其の上の棟の両端に立てた金銅造りの鳳凰が風のまにまに舞うしかけになっています。　堂の内部の装飾や壁画や何かと共に、その当時の進歩した芸術を窺うに十分なものであります。



宇治　　平等院　鳳凰

（第 34 話　**平安時代の学芸美術**　終わり、　第一巻 全話終了。　一旦前頁に戻りください。）